

北海道演劇財団の二〇一七年の活動

北海道演劇財団常務理事／芸術監督 斎藤 歩

二〇一七年の北海道演劇財団は、演劇シーズン2017冬で始まりました。三月までを財団設立二〇周年期間と位置づけ、一〇周年の時に初演したチエーホフ劇「北緯⁴³のワニーヤ」を再演しました。東京から増澤ノゾム、金澤碧を客演に招き、豪華なメンバーによるワニーヤ叔父さんを斎藤歩の脚色・演出・音楽で公演しました。

四月～六月にかけては韓国演劇の若手作家による新作「象じゃないのに…」、そして「亀、もしくは…」サハリン公演、更に清田区二〇周年記念特別公演として「清き田に咲くナンミョーほうれん草」をいずれも芸術監督・斎藤歩の作・演出で公演しました。清田区という限定的なエリアに題材を絞り込み、地域色満載の公演で、清田区長や清田区の公認キャラクター「きよつち」も出演するなど、新しい試みでした。サハリンでの「亀」も好評で、地域か



亀、もしくは… サハリン公演

ら海外へ、様々な取り組みを同時並行で行っています。

八月には札幌国際芸術祭 SIAF 参加企画として「中島公園百物語」を子供のための劇場「こぐま座」と共催して公演しました。中島公園の歴史を子どもたちと掘り起こし、今は無くなった様々な施設やエピソードを夏の夜に妖怪として蘇らせた、妖怪パフォーマンスを人形劇作家の沢則行さんと共に創作しました。このほかにも札幌国際芸術祭にはアイヌ民族ヴォーカルグループ「マレウレウ」と韓国入ダンサーのチョン・ヨンドウ、日本人ダンサーの東海林靖志らによるダンス作品「raprap」をシアターZOOから出品し、この作品は来年、ロシアのハバロフスクでもリメイク版を公演する予定です。

秋には三年ぶりとなる道内ツアー「空知る夏の幻想曲」で江別・中標津・石狩・帯広・新札幌・北広島・岩見沢で空知の石炭と小麦のファンタジーを公演しました。これも地域に密着した題材で創作した物語でした。

子どもを劇場に招き入れる企画として昨年から始めたシリーズ「劇のたまご」を継続し、清水友陽の構成演出で「ぐりぐりグリム第一章・おかしな森のヘンゼルとグレーテル」を公演しました。未就学児童も観劇できる親

子観劇デーが好評で、来年以降、この企画を増やす計画です。

演劇財団で運営している小劇場シアターZOOでは、企画公演として、若手劇作家三名を選抜し、三本の新作を創りました。proto Paspoor「ある映画の話」の小佐部明広・木製ボイジャー14号「ホテル」の前田透・RED KINING CRAB「ガタタン」の竹原圭一、三名の若手劇作家に企画立案の段階から劇場が関与し、戯曲の点検作業として、年長者の劇作家・演出家・俳優によるリーディングを行い、稽古前に戯曲の点検を行い、弱点などを指摘。また、劇場入りする一〇日ほど前から、劇場に併設された稽古場をカンパニーに開放し、仕込み日数も一週間ほど劇場で行えるように手配しました。普段、稽古場探しに苦労したり、仕込み時間が足りずギリギリに舞台を組んで、リハーサルも不十分なまま初日を迎えることの多い若手劇作家・演出家に、創造型劇場として関与・支援して新作を発表しました。

この他にもシアターZOOでは下鴨車窓（京都）、道産子男闘呼俱樂部（東京）、MAM（東京）など、全国各地から優れた小劇場作品を北海道に招いたほか、落語家・桂枝光さんによる寄席を四回開催し、地域の落語ファンに小劇場で楽しむ寄席が定着してきています。

道内各地に良質な演劇作品を届ける地域文化事業も、四演目行いました。

七月に芸術監督の斎藤歩が、梅田芸術劇場の制作作品「OTHER DESERT CITIES」東京・大阪公演に急遽客演。青森県立美術館からの依頼で、プロデューサーの木村典子が通訳・コーディネーターとしてダンス作品の製作に携わったほか、斎藤歩が作・演出を担当して「津軽の女」という新作も創造しました。こうした外部からの依頼に道内の人材を派遣する仕事にも、積極的に対応しています。

二〇一七年は道内各地に演出家や俳優を派遣して行うワークショップの事業を、大幅に拡大した年でもありました。平成二七年度のデータと比較すると、実施件数で一七件（H二七）から三八件（H二九見込み）で倍増させ、実施回数は五二回（H二七）から一四四回（H二九見込み）、派遣人数も参加者数も、ほぼ倍増させています。小学校・中学校・高校のクラスや、地域の集まり、子育て世代のサークル、乳幼児のためのベビーマッサージ、高齢者のグループ、ボランティアリーダー研修、地域の僧侶の研修会など、そのニーズも多様で、札幌市内以外では、紋別・当別・石狩・恵庭・北竜・砂川・北広島・岩見沢・江別ほか、全道各地へ拡がっています。

今、こうしたワークショップを地域で担える人材を育成することの必要性が急速に高まっています。当財団でも、こうした人材育成のプログラムも検討を開始しています。

劇場・演劇を取り巻く社会からのニーズが具体化し始めているを感じています。社会包摂（ソーシャルインクルージョン）のための取り組みを、さらに増やして、演劇が、劇場が社会に不可欠な要素であると認識される

ためにも、私たちが取り組まなければならないことはまだまだ山のようにあるのです。それを一つ一つ、積み重ねて次の三〇周年という節目に向かって行かなければなりません。

Theater Go Round 札幌劇場祭 2017 報告

札幌劇場連絡会会長 藤村智子

TGR 札幌劇場祭2017は、十一月一日から十二月三日まで三三日間の会期で、三三団体が参加。そのうち大賞に二〇劇団、新人賞に五劇団、計二五劇団が賞にエントリーした。

後ホームページ上に掲載する、また各賞も俳優賞を新設するなどし、賞の内容は、大賞、優秀賞、特別賞、新人賞、審査員賞、オーディエンス賞、俳優賞とした。各賞の結果は次のとおり。

【大賞】

yhs「白波っ!」。

TGRは二年目を迎えた今年、賞及び授賞式の内容の見直しをした。二〇〇六年のスタート時から五年目になる二〇一〇年に公開審査会・授賞式の形式となった。当初は画期的なこととして受け止められたが、回を重ね、公開審査会が常態化していく中で、徐々に審査会に対する見方も変化して、ここ一、二年は公開審査会不要論が多く聞かれるようになった。SNSなどを通じて容易に作品に対する反応が得られるようになったことなど、時代の変化も要因の一つかもしれない。

このようなことから、札幌劇場連絡会として内外の意見を伺いながら検討を重ね、作品の講評はTGR閉幕

【優秀賞】

〇トランク機械シアター「ねじまきロボットα」ともだちのこえ」。